一、「クロアシアホウトリ」(Diomedea nigripes, Aud.) 前種に酷似すれども、全身は黑色にして遙に形小なり。嘴及び脚も亦黑くして、在島者の間に「クロカガー」の名を以て知らる。英語の所謂 Audubon's Albatross は乃ち是なり信天翁と伴ひて棲息し、其習性等は略相似たり。然れども之を前種と比較するに、本島には其數少く、且渡來の期も少しく遲し。在島者の供述によれば、此種は前種の如く島內に深く入込みて林間叢中に巢を營むをなく、海岸の岩上に少許の草等をしきて產卵すと云ふ。卵は又一巢一個にして「アホウトリ」の卵より少しく小なり。予が得たる卵は其數少きを以て茲に平均數を擧くる能はざれども、一卵の大さを記さんに、長徑一〇、四セメ、短徑七セメ、あり。其他鈍端に於ける班點の狀等は「アホウトリ」の卵に等し。十二月の頃に雛多く孵化し出つ。雛の羽は全く黑色の羽毛にして「アホウトリ」の雛に異らず、一見判別し難きが如きも、嘴の短きを以て「アホウトリ」の雛と區別し得可し。翌夏六月の候、雛も成育して此島を去る。此鳥の羽毛は黑きを以て價格低く、其數も亦少きを以て重要視せられず。

本種の分布に至りても、略前種に等し。「ベーリング」海峽以北には未だ見られしことなきも、之より以南の太平洋上には、極めて普通にして、「アホウトリ」と混し、臺灣沿岸に至り、本島の外亦小笠原諸島にて繁殖す。

三、「オホミヅナギトリ」Puffinus leucomelas (Tem.) 本島居住者の主要なる者にして、大さ鴨に及ばず。体の背面は褐色を呈す。各羽の先端は、大概暗色を呈するを以て、一般に「カスリ」樣の觀あり。然れども躰の下面殊に腹部は純白にして、美く且つ甚だ柔かなり。嘴は「アホウトリ」に似て、尖端下向し、角色を呈す。脚は之れに反し、薄赤き肉色を帶ぶ。在島者間には「カゴ」の名にて通じ、英名の Siebold's Shearwater なる者は此種なり。此鳥の本島に多く來るは五月初旬にして、予等の赴きし時は恰も其盛期なりき。每日夕方に及べば無量數萬の鳥群は海面を被ふて飛び、實に夕陽の殘照と相對して一大偉觀たり。鳥の島上に下る際仰て空中を見れば、其光景夏の夕、軒下に群かる蚊軍の如し。夜間は皆島上に留りて、終霄「ピー、クー」の奇聲を發し、殆んと吾等の安眠を妨げたり。鳥は島內何處にもありて、樹根又は石下寺に三尺位の橫穴を穿ち、其中に棲息す。各孔には必ず雌雄の鳥あり。予等在島の際は未だ產卵期に達せず、爲めに實驗する能はざりしも、五月末より六月中旬迄は此鳥の繁殖期にして、鳥は各其穴の中に一卵を生むと云ふ。鳥の渡來盛なるに至れば、塲處狹隘を告げ、爲めに穴を穿つに至らずして、地上に產卵する者多し。卵は三週間を出でずして孵化し、雛となる。雛の羽毛は全身一樣なる「カスリ」色にして、十月初旬の頃生育して飛去る。島上に在る巨數の鳥は、夜間穴を出て、地上を馳け巡ぐり、其喧しき名狀す可からず。在島者の此鳥を捕ふる法は甚だ簡にして、然も有功なり。乃ち山の半腹に深さ三四尺の長方形の穴を穿つ。穴の四壁には「ヨシ」の莖又は樹枝等を建て鳥の土を堀るを防ぐ。穴の上には極めて卑き斜の屋根を作くりて鳥をして飛出つる能はざらしむ。又穴の入口兩側に高さ一尺位の垣を穴より上へ向け倒八字形をなす樣に築く。鳥は高處より降り來る際、此垣に沿ふて歩み、遂に穴中に陷